

---

# 常闇学園

あじます

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

常闇学園

### 【コード】

N36000

### 【作者名】

あじます

### 【あらすじ】

本家あじます様が即興で書いて投稿してくださいました

常闇学園の原点がここに！

## 序章：死刑執行21分前

「出る、三柳一葉」

独房の扉が開き自分と同じ銀髪の女が重苦しい口調でそう威厳たつぷりに言い放った、異能殺しと呼ばれる手錠をかけられたまま廊下に出ると一週間ぶりの光が私を襲った、眩しい…それでもやはり嫌じゃない。

「貴様の処分が今日言い渡される」

罪状は謀反、中身は…まあ後々語っていくとしよう。

「…御苦労さまです」

にっこりと自分の姉妹に笑いかけておく、彼女は大分面くらったようだ、それはそうであろう…私はこれから死にいくのだから…長い廊下を監視の兵達に引かれながら進む、無重力空間でマグネツト入りの靴を履いてない私はこうでもしないと前に進めないが、なんだか動物園での客引きになったようであまり好きになれない。好きになっただらそれはそれでおいしいのだが。

「？36789です、個体名一葉を引き渡しに参りました」

「御苦労？36789、確かに一葉を引き取った」

査問委員会部屋前で私が引き渡される、ドナドーナ これだけ短い遣り取りで渡されると私は子牛になった気分だ、まあただの肉塊になる運命は変わらなく子牛と一緒にだ。

薬殺処分されてデータ収集用に中身を分けられてそれで私の一生はおしまい、まあなんと素敵な幕引きでしょうか、ぶらぶらぼらぼら…なんて考えていると扉が開いた。

いつもと変わらぬ査問委員、三柳の胎の中から生まれてきた正統なる三柳の後継者達…私と同じ銀髪が空調の風で揺れ、真紅の瞳が私を一斉に射抜き私の心に恐怖を思い出させた…私と彼らの姿形はそう変わらないが強さは別格だ。

私が謀反を起こした…いや、起こさせられた時に私を鎮圧しにき

たのはこの中のたった一人だった、そのたった一人に精鋭二千人が一分立たずして殺された…生き残ったのは私だけ、最後の私も今こうして死地に向かっている。

「個体名一葉、貴様に処分を言い渡す」

円卓の上座に座っている男が野太い声でそう語る、私の最後の瞬間が訪れようとしていた。

「我ら三柳のクローン体であり御先祖から引き継ぐ崇高なる野望を遅延させた事は万死に値する、温情をかける事も出来ん。よって…」

そこまで語ったところで男の言葉は遮られた、後ろの扉が破られたのだ、査問委員全員の瞳がそちらを向く、私も釣られてそちらを見る…そこには私を罫にはめて謀反を起こさせた張本人がニコニコ笑いながら手を振っていた。

「おはようございます皆様」

「…これはこれは御当主乙葉様…：一体何用でこんな場所にまで御足労願えたのですかな？」

空気が代わる、殺気を押し隠していた先ほどまでの空気とは違う、委員全員が明確な殺意をその張本人乙葉に向けていたが本人はそんなものどこ吹く風、悠然と私に歩み寄り私に服を投げた。

「見覚えのある服…これは…」

「嫌ですわ…決まっているでしょうに」

委員全員が立ち上がり腰の得物に手を伸ばした、余計な発言をすれば斬る…そんな空気だが

「あら？死にたいならお手伝いしてもよろしくてよ？」

委員達の背後からそんな声が響いた、委員達は固まり武器からゆっくりと手を放した。

「そう、それでいいの」

あっけらかんと乙葉は笑顔で言い放った、三柳乙葉…最強の一角であり私が…いやこの部屋の誰もが気がつかぬ間に全員を始末することが出来る女であるが見た目は金髪をツインテールにしたただの幼女にしか見えない、これで二十八歳だから驚きである。

「さ、一葉ちゃん…行きましようか」

査問委員達が齒ぎしりをする中私を引っ張り悠然と進み出した、  
どうやら私の人生はまだまだ続くようだ。

「楽になさつて」

部屋につくなり乙葉はそう言った、この状況で楽に出来る人物が  
いたら見てみたい。

「あ、申し訳ありませんわ」

気がついてくれたようだ。

「手錠を外さないと楽にできませんものね、中西！」

ダメだった、お付きの中西が手錠を外してくれる、両手は自由にな  
った…結構マシにはなったがこの重圧…どうしようもない。

「三柳一葉」

なんだか自分の固有名の前に聞きなれた物がついてきている、そ  
して私は置き去りだ、誰か私に説明してほしい…まずこの人何をし  
たいのつてところから。

「貴女の新しい名前…というにはおかしいかしら？そうねえ…人間  
で言う所の…：…：そうそう、コードネームよコードネーム、あだ名み  
たいなもの」

中々素晴らしい人である、名前や出身を隠すための名前コードネ  
ームでどこのスパイか丸わかりのコードネームをつけるなんてここ  
の大物でもやらない、ルーズベルトやスターリンですらやらないと  
思う行動をやったのけた。

「貴女にやってほしい任務があるのだけれど…：…：どう？戻りたい？査  
問部屋に」

紅茶を嗜みながらさらりと脅してきた、処分されて死ぬか任務で戦って死ぬか選べときたものだ…この人大物すぎる、私にどっちを選んでも得がないのにそんな事言ってる。

でも任務先なら逃げ出す事も…いや、無理だ、三柳から逃げられる者など存在しない…いや一人だけ存在して現在も元気であるらしいが私には無理だ、私の頭脳は逃走開始から一時間後で捕まり殺されるとすでに結論を出した。

なら選ぶのは一つだけ、私も異能者の端くれ、死ぬなら戦いで死にたい。

「やります…」

私は蚊の鳴くような声でそう言った、乙葉は大層満足そうに笑って私に刀を投げてよこした、装備の支給…にしてはいい刀だ、鞘から引き出すと刀身が一瞬燃えた。

「これって…査問委員長の刀じゃ…」

「そうよ、桜火。その子の名前」

「こ、こんな良いものは…」

「構わないわ、それより貴女にやってもらう任務の事だけ…常闇学園って知ってる？」

知ってるも何も私が夢見るほど行きたい場所だ、地球に唯一存在する三年制の異能者学校…年若い異能者が全て集まる学校だ。

「貴女の任務はそこで学業をすること、現地に貴女のサポートたるエンジニアもすでに向かわせた。その服は今年入学した一年生の服ね。理由は聞くな、以上よ。中西！一葉を地球行きの巡洋艦に押し込んでとつと出発させなさい」

無茶苦茶である、任務内容もよくわからないまま中西さんに引きずられる私…ねー私が何したのー？反乱起こしたんだよねーアハハ。

「ああ、そうそう一葉ちゃん」

やっぱり言い忘れていた事があったんだ、希望の眼差しで乙葉を見つめる。

「楽しんで来てね」

いちいち呼びとめる事じゃなかったりとか言いたい事一杯あるのに  
憐れ私はそのまま巡洋艦に押し込められ母なる地球へと旅立って  
いくのだった。

## 第一章学問のすすめ

「はあ……」

気が重い、重すぎる……何をすればいいのか全く分からないしそもそもエージェントって一体誰が私に着いたのだろうか？

私の隊は全滅したはずだったし乙葉のお付きは中西か四聖天位しかいない……まさかこんな学園の為にだけに四聖天を動かしたりはしない、お付きのエージェントは校門で待っていると言われたが……

「ちよつと鈍ったかなあ」

私はリハビリがてら腕力だけで崖を登っている、でもきつい……この山標高一体いくつあるのかすらわからない、目測で富士山よりは上だろうとは思っていたが龍種や魔獣達がうようよする森を抜けたと思っただけで崖を登っている、他にも崖を登ったり飛んでいたりしている異能者が居たりしているからこのルートで間違いないんだろうけど……や、やっぱり私も大人しく飛んで……いやいやそんな事でこれから先生に残って行けるとは思わない、多分査問委員会からの刺客もいるだろうし……今は少しでも強くならなきゃ。

そうこうしているうちに頂上が見えてきた、大して長くもない監禁生活で鈍っていたのは私の根性だったようだ。

「よい……しょつと」

崖から体を持ち上げて服の埃をはたく、そこまで汚れてはいないからまだシャワーが必要になることはないだろう。

「わあ！」

地図にも載っていない無人島にある常闇学園、旧異能者遺跡を改築して作られたそれは見事な物だった、どこの日本の校舎に似た建築様式ではあるがどこなく違うそれ、切り立った崖に囲まれてはいるがミスリウムで構築された頑強な土壌の上に構築された建造物、確か三柳のデータでは異能者が地球に出来た頃に起こった第一次人異大戦の名残であるとか見た事がある。

とても広大な敷地に立つ巨大建造物、歴史を感じさせた、異能者がどれだけ人間にうとまれたかを考える事ができた、巨大な門：今は開かれているが：この門はどれだけの異能者を受け入れて人間を拒絶してきてくれたのだろうか、その門の足元に銀髪の男が居た。

鶏の骨を顎でかくかくさせながら遊んでいる、どうやら結構待たせてしまったようだ：えっと私のコードネームを伝えればわかってくれるかな？

「：ようやく来たのかよ、姉さん」

鶏の骨を吐き捨てて、ついでに吐き捨てるようにそう言った。

「龍葉？まさか：私と同じ生産ラインだった同じ個体名有りの：」

「ああ、久しぶりだな姉さん」

龍葉はにっこりと人懐こそうに笑った、男の子なのに私と見た目はそう変わらない：いや決定的に違う部分がある、それは声：龍葉の声はものすごくハードボイルドなのだ。

具体的に言うの大塚 夫。

(この顔はまた訳のわからない事を考えている顔だな)

龍葉は率直にそう思い地面に置いてあった二振りの刀を制服についでいるホルダーに戻す、ここは常闇学園、いつ戦いが起こってもおかしくない学園だ。

ここで一葉を待っている間にいくつも見覚えのある異能犯罪者が通った、それも莫大な懸賞金をかけられている一級の賞金首ばかりだ、在校生にも多数の危険人物を発見した：中でも注意すべきなのはここの生徒会長をやっているバーナード・マクレーン、先程何人が斬り殺したルリアン・ベッケンバウアー、朝早くに来てさっさと屋上で昼寝をしているエイブラハム・クルスト：この三人だ。

元イギリス陸軍大尉バーナード・マクレーン：通称ネクロフィリアマクレーン、闇に堕ちた異能者の一人で美しい女の遺体に興奮しそれを永遠と生産する為に女を狙い続ける危険人物だ。

三十二の死刑判決を受けた死刑囚ルリアン・ベッケンバウアー、闇に堕ちた異能者の一人で人間を目の敵にする危険人物だ、こいつ

に殺された人間の数は十万を超えるという。

伝説エイブラム・クルスト：通称スマイルメイカー間に墮ちた異能者でもなく、ましてや人間でもないこの男は何の酔興か戦争を根絶して回っている、こいつの驚く所は三柳含む暗殺五家に喧嘩を売ってもまだ生きている所だ、だが手出しをしなければ安全な男らしいが：要注意だ。

「龍葉、どうしたの？」

「ああ、すまない：ちよつとした考え事を：ね」

龍葉は再び人懐こそうな笑みを浮かべて学園の中へと入って行く、首を傾げながらもそれを追って私も中に入ると突如アナウンスが鳴り響いた。

『あーテストス：聞こえているな、諸君、おはよう。現在最後の入学者が校門をくぐった、これより入学式をはじめめる。』

唐突なアナウンスに口がポカーンと開いてしまった、どうやらそれも周りに居る新入生も同じようでもわずかに困っているが在校生を見る限り今回これが特例というわけでもないようだ。

『私は生徒会長のバーナード・マクレーンだ、よろしく頼む：挨拶はもういらんな？：今年はなんと異能者以外に魔族、人間の新生入生を入れるらしい。皆仲良くやるように：さてそれでは入学式を終わりにして歓迎会の説明に映らせていただく。この学園は異能者学園である：異能者式の歓迎といえやはり喧嘩だ！なお毎年この歓迎会で死者もでているが：なあに、気にする必要はない。ルールは簡単だ、戦い続けて生徒の胸についているバッジを五つ集めて日が沈むまで立っていたら勝ちだ、日が沈むまでにバッジが五つに満たない者は即退学だ、死んでも退学だ。以上：楽しんでくれよ？開始の合図は花火があがるそれでは皆：グッドラック』

そう言つてアナウンスは切られた：辺りにざわめきが広がる、ざわついているのは魔族：子供にしか見えない体格の男女と人間だけだった、異能者達は落ちつき払い得物を持って戦闘態勢に入っている。

異能者は元々力比べが好きだ、だがそれは命を奪う行動が好きを言うわけではない、単純にどちらが強いかを決めるだけの力比べが好きなのだ、勝者の勇敢さに惜しみない称賛を、敗者の素晴らしい健闘を讃える、それが異能者の戦いだっただはすなのだが…ある時病気にかかる事がない異能者に奇病が見つかった。

### 殺戮症候群。

そう呼ばれたそれは闇に堕ちると形容された、治療は不可能でこなくなった以上その異能者の名誉の為に周りの異能者の生活の為に殺すべきなのだが…普段は異能者を敵としている者達が立ちはだかった、人間が喚きだしたのだ。

異能者にも人権はある e t c … 同族同士で殺し合うのは馬鹿げている e t c … 殺戮症候群に陥った者に救済を e t c …

異能者は人間と争いたくはない、人間のゴキブリのようなしづとさはわかっているし何よりも人間は殺戮が好きで同じ過ちを何度も繰り返し被害者を無視して神とか呼ばれる偶像に許しを乞う H E N T A I 種族、好んで関わりたいと思う異能者はまずいない。

異能者は山奥でひっそりと集落を作つてのんびりと暮したいと思つていたが人間はそれを許さなかった、だから異能者は人間を嫌う。話が反れた、とりあえず今は戦闘に集中しなくては。

「おー嫌だ嫌だ…戦いなんて虚しいだけなのになあ…誰もわかつちやいやしねえ」

ボサボサ頭の巨人がのっそりを現れた、死んだ魚のような緑色の瞳を左右に動かし敵となるであろう者の位置を確認しながら飄々と歩いている。

「エイブラハム・クルストか…！」

龍葉がくぐもった声でそう男の名前を呼ぶ、聞き覚えがある…確か…そう、この世界で一番戦つちやいけない人物つてマザーコンピューターから教わつた事がある。

「はっ、三柳んとこの兵隊ちゃんか。俺を殺るには数が少なねえなあ…」

身の毛がよだつ殺気がこちらに押し寄せ、殺気だけで走馬灯を見せるなんてクルストと言う男はどんな死線をくぐってきたのだろう？

三柳に目をつけられて生きているだけでおかしい人物だからなんら不思議に思えないのが何故か悲しい。

「えっと、クルストさん」

「ん？」

とりあえず敵意がない事を伝えないと殺されかねない…！

「私たちクルストさん殺す気ないです」

「あつそ、んじやいいわ」

あつさり納得して引きさがってもらえた、やる気なさそうにクルストは校舎の中に戻っていく…なんだろう？案外素直な人なのか？

「…そんな訳ないだろう。俺達に不意打ちされても負けない自信があるからあんな事出来るんだ…！舐めやがって…」

龍葉は納得できてない様子、無駄に命を散らさなかつただけありがたいと思っただけ欲しい。

友人先輩変人（前書き）

あじますさん早いです、はやすねですw

## 友人先輩変人

余談ではあるがこの常闇学園の制服はブレザータイプである、黒を基調とし金の刺繍があり男子の制服はかつこよく、女子の制服はかわいらしく出来ている。

だがしかし、この制服は見た目はもとより性能は服としての常識を逸していると言っても言い過ぎではない、まず靴合わせ重さがグラム単位以下しかないなどがあげられる、動きやすさ、フィット感、通気性、断熱性などが物凄い、正直服を着てるかどうかすらわからない位のレベルであるがさて防御力はどうなのだろう？

こちらもちちらで大変素晴らしく仕上がっている、対物ライフルでも傷一つかかずナパームが直撃しようが制服は焦げたりすらしない等々安全性もかなり高く出来あがっている、しかもこの制服日本貨幣で五千円とかなり安く売られておりそれすらも払えない苦学生は無料で六着進呈してもらえる。

「姉さん、どうしたんだ？」

龍葉が唐突にそう尋ねてきた、随分と怪訝な顔をしているが…どうやら長く考えすぎてしまったようだ、でもいいよね？私女の子だもん！

「どうでもいいから…戦ってくんねえかな？もう始まってるんだよ！」

見知らぬ異能者の攻撃を二振りの刀でいなしながら龍葉は怒鳴るようにそう言い放った、腰の刀に手を伸ばして引き抜くと辺りの空気が擦れ合い桜火が激しく燃え上がる、理論はこうだ、刀身にナノ単位の隆起を作り柄から可燃性の粉塵を吹き出し発火させる居合刀…以外とハイテクな武器であるのは間違いない。

「はい！」

向かってきた異能者の斧をいなし背後に回り込む、そして致命傷にならなく動けなくなる程度に背中を斬りつける。

「あがあ!？」

発火する傷口をかばいながら異能者は倒れる、心の中で謝りながらバツジを引きちぎるように外してポケットにしまう、これで自分のと合わせて二個：後三個集めて逃げ回っていれば私は問題なくここに残れる。

「姉さん！終わったら寮の前で落ち合おう！」

気が付いたら龍葉と分断されていた、あちこちで武器を打ちあい魔術を撃ち合い生徒達は戦っていた、足元には大量の怪我人：あの戦場のど真ん中に突っ込む勇氣と無謀さは流石に持ち合わせてはいない…

「わかつたよ！龍葉！気をつけてね！」

叫ぶように返事を返して校舎の中へと駆けこんでいく、このらんちき騒ぎは時間が経てば経つ程不利になってくるのは言うまでもない、今強い異能者と戦って手の内全て晒す事は避けたい…私の使っている三柳流は奇襲第一の暗殺剣である、バレて対策を取られる事だけは避けなくてはいけない。

「お、三柳のお嬢ちゃんじゃねーか。こんな所でほけつとして何やってるんだ？」

刀に手をかけて抜刀しようとした所で踏み止まった、攻撃しちやいけない人物を攻撃するところだった、明るい声とは裏腹にムスツとした顔の巨人が臍物に塗れた剣を担ぎこちらを見下している…空いた手で五つのバツジを退屈そうにいじりながらこちらをまっすぐ見つめてくる。

「そ、それ…」

初日から制服を真っ赤にそめて脳だか腸だかわからない物を剣にまわりつかせクルストは怪我一つ被う事無く仏頂面のため息なんかをついている。

「ああ、襲つてきやがったから貰った」

そしてこの悪党はしれつと嘘をついた、彼の力量なら殺す事なく奪えた相手あるう事は理解できる…巨剣に付着している血が刀身真

ん中の一ヶ所しかない事から恐らく一太刀で五人葬ったのだろうと理解できる。

「貴方：余分な殺戮を…」

何故か沸々と怒りが沸いてくる、何故だかわからない…わからないし私だって悪党であるはずなのに…この男だけは許しちやいなというような気がして怒りが沸いてくる。

「お嬢ちゃん」

明るい声色のままクルストは意外にもフレンドリーに話しかけてくる。

「俺は殺しに来た奴らを生かしたまま返すなんて甘い事をしたことあねえぞ」

それは先程の事だろうか？

否、私の事であり彼らの事であるのは間違いないだろう、先程から手が白くなるほどの力で刀を握り締めてそれを抜くのを押しとどめていたから…クルストはそれを見てそう言ったのだろう、要訳するところだ。

《そいつを抜いたらお前は死ぬ》

クルストはそう言っているのだ。

「ぐっ…ぐっ！」

挑発されている、この男の噂は聞いた事がある…戦争を根絶して笑顔の花を咲かせる小国の英雄…なんて真っ赤なウソなんだろう。

「クツクツク…お嬢ちゃん、噂と違う…なんてふざけた事考えてねえか？」

猫撫で声を出して私のものまねをするクルスト。

「う」

考えていた事をぴったりと当てられて体が硬直する、それを見たクルストは肯定と見たのだろうか？ 腹を抱えてくつくつと笑いだしこう言い放った。

「クヒツ…やっぱりそうかい、予め教えてやるよ俺は全生物の味方でもあって敵でもあるんだ…甘い考えを捨てな、ここは香ばしい戦

場の匂いしかしねえしよ…警告は一度だけだ、お嬢ちゃん？生き残る事だけを考えな」

それだけ言うとかルストは踵を返してそのまま立ち去って行くこととする、少し拍子抜けだ、もつとぼろくそにいわれると思ったのに…  
「待て！クルスト！！」

私の後ろから怒鳴り声が飛んだ、クルストはぴたりと足を止め首だけを動かしてこちらの背後をみやりいやらしくニタリと笑った。

「これはこれは…ロボット工学の権威、新城博士のお子様方ではありませんか」

そしてそのままいやらしい笑みのまま振り返り剣を軽く振った、こちらに血と臓物が飛んでくるがソレらは私を器用に通り過ぎ後ろにいる誰かに当たった。

「くっ！馬鹿にしゃがって…」

後ろを振り向くとくしゃくしゃ髪の高い男子と小さめの女子が立っていた、男子の方の瞳は復讐に燃え、小さな女子の瞳は怯えが浮かんでいた。

「に、お兄ちゃん…止めようよ…お父さんだってこんな事望んで…」  
「うるさい！美咲はだまつてる！！僕は今日この日の為に…この日の為だけに生きてきたんだ！」

お兄ちゃんと呼ばれた方は拳を作り足を引いてステップを踏み始めた、これは…スポーツ空手？

「クッククック…若いねえ…」

クルストは剣を背負い同じように拳を作った、邪魔してはいけない…なんとなくそう思っただけで後ろに下がった。

「…はあっ！！」

お兄ちゃんが一気に踏み込みクルストを肉薄する、あの兄妹の兄の方はどうやら人間のようだが中々の素早さでクルストに拳を放った、その拳は吸いこまれるようにクルストの顎に伸びて擦り抜けた。  
「おぐっ…」

鈍い音と同時に兄の体がくの字にまがり顔面から地面に叩きつけ

られていた、兄はピクリとも動かない…私の目が捕えたのはただのスウエーと打ち方も滅茶苦茶な膝蹴り、とんでもない速度のテレフオンパンチだけだった。

「クカカカカカカカ、甘えよ…甘すぎるぜえ…」

頑丈な靴で兄の頭を踏みつけるクルスト、そのまま踏みにじっている…もう我慢できない。

「その足を退けなさい」

刀を引き抜いてクルストに突きつけ宣言する、彼は気に入らなかつたのか驚いたのか片眉を跳ねあげて私を見つめてきた、正直足がすくむ。

「へえ〜」

何か面白い事でも思いついたのか足を退けて数歩だけ後ろに下がって兄を顎でしゃくった、取りに來いといった解釈でいいのかな？警戒しながらジリジリと近づいていく、クルストはポケットに手を突っ込みながらニマニマ笑うだけで何もしようとしない…後数メートルといった所でクルストはポケットから手を出した、反射的に身構えてしまう。

「何してんだ？とつとと取りに來い」

楽しげにクツクツと笑いながらクルストは煙草に火をつけた、どうやらからかわれただけのようだ、煙草からフルーティな香りが立ち上る…麻薬ではない、匂いからするとフルーティな香りがするだけの葉っぱだ…効能は気休め程度の沈静作用のみ…

じりじりと接近してようやく彼の元まできた、緊張で心臓が飛び出そうになっている、冷や汗も止まらない…彼の首に指を当てて…脈はある…次に口に手を当て…

「あ、ちゃんと生きて…」

突如火花が散った、地面に倒れたときにはなんとも言えない激しく嫌な痛みが口と鼻に広がってようやくそこで蹴られたというのが実感できた。

「ハッハッハア！面白いなお嬢ちゃん、こお〜んな単純な手にあつ

さり引つ掛かりやがって」

体を起こしてクルストを睨むと腹を抱え私を指差しながらゲラゲラと楽しそうに笑っていた、痛む鼻を押さえ火花の散る瞳を瞬きして正常に戻し刀を構えるとクルストは両掌を天井にあげた、やれやれのポーズだ。

「殺し合う気はねえよ、こいつぁ楽しませてくれた代金だ、これだけ持ってけ」

気絶した彼の体に夥しい量のバツジが降り注ぐ、数は五十ほど…みんな血塗れでポロポロだ、死体から奪い取ったのか？いや…殺したのだろう…

「中々に楽しかったぜえ…甘ちゃん、また遊ぼうぜ」

愉悦に表情を歪ませクルストは立ち去っていく、その背中に一言だけ負け惜しみを放っておく。

「このバツジ達の血の代価はいずれ払わせてあげます…」

クルストが肩越しに振りむいた、交差する視線…クルストの目はいつもの濁った死んだ目じゃなく爛々と緑色に輝き私を射抜いた、あの目は見た事がある…とてつもなく大きな野望を抱いた漢の目だ。  
「おうよ、楽しみに待ってるぜえ…フツ」

現か幻か、漢の目は悲しげに揺れてクルストは姿を消した、それを確認して兄妹にかけよる。

「大丈夫でしょうけど…一応治療しましょう」

兄の状態は気絶させられただけとしか見えないが一応治療はした方がいい、人間は異能者に比べて脆いからなるべく急いだ方がいいかもしれない。

「あ……お願いします、えっと…」

美咲が困ったように眉間に皺を寄せて考え込んでいる、そういえば自己紹介がまだだった、自分の大きくなり小さくもない胸に手を当ててゆっくりと喋る。

「私は新入生の三柳一葉です、一葉で結構ですよ美咲さん」

微笑んでみせると美咲も笑顔をみせるようになってくれた、この

子なんだかかあいいよお。

「私は新城美咲といいます、一葉ちゃんと同じで今日入学しました」  
一生懸命自己紹介してくれた美咲に少し好感を覚えた、美咲兄の頭を正座した太ももの上に乗せて怪我の具合を見るが：脳内にも傷一つなくただ気絶しているだけだった、外傷は鼻が赤くなつて鼻血が出ている程度だし：水筒の水でハンカチを湿らして患部を冷やすことにした。

「あ、それでこの人が私のお兄ちゃんの新城銀介っていいいます、この二年生です」

どうやらこの人、クルスト相手ではそうは見えなかったが結構強いらしい、スポーツ空手だけで排他的な常闇学園に入学した初の人間の生徒といったところであろうか、そうとうな努力家だ。

「うっ…うっ…」

彼が目を覚ましたようだ、ハンカチをどけようとして思い切り私の胸を掴んだ…え？

「あれ？なんだか柔らかいぞ？…うーん？」

そのままむにゅむにゅもにゅもにゅと私の胸は面白いように形を変えて彼に弄ばれていく、銀介以外動きが固まってしまっている、私はゆつくりと顔をあげて美咲を見ると彼女も同じように自分を見てきていた。

「にゃ」

「ん？膝下も柔らかい？」

「にゃあああああああああああ！？」

彼の顔に私の拳が炸裂した。

「大変申し訳ない！」

それから数時間、彼はずっと平謝りを続けていた。

「もういいですよ、その…事故ですし…」

私もそろそろいい加減どうでもよくなつて来た頃だ、結構前からいいと言っているのに彼は謝る事を止めない、珍しい人間である。

「いや、そうやって簡単に許していただく訳にもいかんだろうし…」  
彼は苦笑いしながらバツの悪そうに頭を掻いた、私にどうしろと  
いうのだろうか？

「この詫びは後日必ず入れたいと思うのだが…確か一葉君と言ったか？妹の美咲から聞いているとは思うが一応自己紹介させていた  
だく、僕は新條銀介、この二年生だ」

彼は丁寧になんと言って頭を下げた、自分もそれに合わせて頭を下  
げておくがどうも場違いな空気になっている、外では剣戟の甲高い  
音や魔法の爆音が聞こえてくるのにここだけなんだか噂に聞くお見  
合いみたいな空気になっている。

「これはご丁寧に…私は三柳一葉と申します、どうぞよろしくお願  
いいたします」

「これはどうも…」

「……………何やってるんだろうこの人達…」

美咲の視線が痛い。

「ところでこの大量のバツジは？」

視線を物ともせず銀介は端に乱雑に置かれているバツジに視線を  
移した、確かにいままで突っ込まれなかったのが不思議でしかたな  
い位の量だ、謝る事しか考えてなかったのだろうか？珍妙な人であ  
る。

「それはクルストさんが置いていったものです、楽しませた代金と  
か…」

「ってちょっとこれは不味い話題だったかな、銀介は確かクルスト  
を目の敵にしてさっきまで戦闘を繰り返して…一方的に蹂躪されてい  
たけれど…ていたのだし…」

「ふむ…じゃあ有りがたく貰っておこうかね」

銀介はバッジを四つだけ拾ってポケットに忍ばせた、あれ？なんだかちよつと違和感があるようなないような。

「一葉ちゃん…お兄ちゃんただ単にクルストさんに挑戦したいだけなんです」

美咲がこつそりと耳打ちしてくれた、なんだかちよつとややこしくなってきたような…

「お兄ちゃんクルストさんに憧れているだけなんです…クルストさんロボット工学でもトップで弟子入りしたがってたけど断れて勝てたらいって言われてるから…」

私が蹴っ飛ばされたのはなんだったのか小一時間問い詰めた理由を聞かされて啞然としながら銀介を見た、当の本人はバッジが悪そうに頭を掻いた、照れているのはなんとなくわかったからよしとしよう、いやよくないけど。

私もバッジを取って起ちあがる。

「それじゃあ学園内にあるケーキ屋さんに今度連れていってくださいね」

これは確かに埋め合わせも必要だわ、無理矢理納得して銀介にそう言うっておくケーキの一つ二つ奢ってもらわなければ私の鼻の痛みが無駄になってしまう。

「あ、ああ…今度の日曜日にも…その時ハンカチは洗って返すでしょう」

「ええ、是非」

につこり笑うと銀介は顔を赤くして顔を背けた、自分の手を見てまた違う方向に顔を背けた、なんだか結構愉快で珍妙な行動をする人である、外を見るとすでに夕方だ。

戦闘音もすでに止んでいるという事はもう終わったのだろう。

「閉会式の後には学生寮で食事会だ、一葉君も美咲と一緒に参加するといい。僕は準備があるから先にいこう、それでは」

彼はそう言うって会釈するところかに立ち去っていく、校内アナウンスで校長らしき人物が長々と説教を垂れている、私は美咲と視線

を合わせてなんとなく笑った。

学園で初めての友達ができた、胸揉んだけど理性的な先輩もできた、初日にしては上出来であると思いたい。

「あ、美咲さん、私弟を待たせているんですけど一緒に行ってもいいですか？」

「うん、いこ！一葉ちゃん」

美咲に手を引かれて学生寮へと急ぐ、まだアナウンスは終わっていない、どんな知的生命体でも老人は長話が好きであるとはよく言ったものだ。

## 友人先輩変人（後書き）

どうもこんにちわこんばんわおはようございます、はじめましての方ははじめまして、お久しぶりの方はお久しぶりですあじますです少しでも楽しんでいただけましたでしょうか？

本職の片手間に書いているので結構雑多です、それでも楽しんでいただけたら幸いです。

さて、昔書いた常闇学園を御存じのお方はお気づきかも知れませんが初期状態からクルストが居ます、性格自体はかわりません、相変わらずの悪党です。

これにより何が変わるのか？誰が生き残って誰が死ぬのか大分変わると思います

一応正史に最も近いお話ですが正史ではないと御理解くださいませ  
またお会い出来るとうれしいです  
それでは皆様さようなら

## 動き出す十字と究極

入学して一週間もすればわかってくる事がいくつかある、この学園は授業が極端に少ない事とかその他もろもろである、授業が少ない理由は単純に教える事がないからである。

ただし自分が望めばその道の教師からいろいろな事を学ぶ事ができる、銀介もロボット工学を受講しているようだし美咲に関しては何故かここで花嫁修業を行っている…と言った感じで望めば駆けあがれる学園で有る事は間違いない、努力家には楽園、流され型に填められて生きて来た者にとっては地獄といった所だろうか？

「一葉ちゃん一葉ちゃんこれ上手にできたと思わない？」

美咲が綺麗に焼けた卵焼きを振りまわして笑っている、彼女の料理の腕前は凄まじい程のスピードで上がって行っている。

「あ、綺麗な焼き色ですね…味見しても？」

「うん！食べて食べて！」

「それでは…あっおいしい、昆布出汁だったんですね」

「そうなの！卵の形を崩さずに出汁だけをね…」

「……………」  
ちなみにここは屋上、高い標高でも何故か暖かい常闇学園だからこそここで昼食を取りたくなってしまっ、いつもここに居るクルストが迷惑そうな顔でこちらを見てきているがこの一週間で慣れてしまった、こちらが何もしなければ迷惑そうに見えてくるだけだし、彼昼寝しているだけだし。

「…ちっ！」

追い出せなかったらこうやって舌打ちして不貞寝するだけ、蹴り飛ばされたささやかな復讐でもあるので私は結構楽しい。

「……………」

そつえばここ一週間で気がついたのだが何故かクルストの傍らにはいつも無表情で白い髪の女の子がいる、何をしてもなくクル

ストと一緒にいるだけの女の子だ、いつもクルストが寝ている隣でぼーっとクルストを眺めているだけなのだ。

クルストも何かする訳じゃなく寝ているだけ、恋人なのかどうか聞いてもクルストは迷惑そうに視線をこっちに向けて再び昼寝に戻るだけだからどうなのかはさっぱりわからない。

「やっぱり恋人同士なのかなあの二人……」

美咲がそうぽつりと呟いた。

「え……でもクルストさんに恋人ってなんだかすごく似合わないよ  
うな……根無し草で甲斐性とか無さそうですよ？」

結構失礼な事を言っているのはわかっていて、でもこの男に甲斐性なんてありそうに見えないのだ、物凄く震えているけど無視しとこう。

「……テメエらなあ………死にたいんですかい？ああ!？」

殺気を陽炎のように立ち上らせながらクルストは立ち上がる、あれ？凶星ついちゃった？

「凶星なわきやねーだろ！コイツはオメガ！お嬢ちゃんこの最新型の兵隊だよ！俺がテスト任されてんの！Do you understand!？」

「あんだーすた〜ん？」

クルストが怒鳴り散らしこちらに向かって指を突き付けるとオメガも真似して気の抜けた声と共に指を突き付けてきた、なんだろう……この二人すっごくお似合いのような気がしないでもない。

「くる……すとお」

くいくいとオメガがクルストの袖をひっぱりクルストはそれに答えるように顔をそっちに向けた。

「おなかへった」

「さつき食べたでしょ」

「おなかへった」

「………はあ、パンならやるよ」

「わ〜い、あんだーすた〜ん」

「使い方が違う」

そして唐突に漫才し出す二人、やっぱりお似合い…いやむしろペツトと飼い主？

「ひさしぶりだな〜きょうだい」

パンをもごもごしながらこっちにオメガが近づいてきた、セクシィポーズのような変なポーズでこちらを指差している、なんかウインクしてきた。

「えっと…どこかであった事でもありますか？」

「ない」

「……」

会話終了、美味を見ると若干引き気味で後ずさっているがもしや私を同類ととらえているのだったらそれは大きな間違いである、地動説レベルの大きな間違いである！大事な事だから二回言いました。

「オメガ、けるぞ」

意外な人が助け船をだしてくれた、呆れ果てながらオメガの手を引いてズンズン進むクルストと哀愁を誘う声をあげながら引かれるオメガ…やっぱりペツトと飼い主にしか見えない、とってもかわいらしい関係だとは思っただけれどなんだか腑に落ちない。

「あ…またな〜きょうだい…おめがはなんどもよみがえるさ〜」

「どこで覚えたんだよ全く…」

あのまま漫才しながら寮まで帰るのだろうか、でもやっぱり異和感が…物凄い異和感がある。

「クルストさんってあんな性格だったっけ？もっと悪党悪党してたような…」

「あ」

確かに、何故あんなコミカルなキャラになっているのか気になっていた所だ、もっと冷酷な目をしていたような気がした。

「でもまあ…」

「ええクルストさんですしねえ…」

クルストと言えばだいたい納得できてしまう、二人でうんうんと神妙に頷いて結論を出した、理由：クルストだから。

「姉さん、あんたまたここに居たのか」

クルストと入れ違いで龍葉が屋上を訪ねてきた、非常にダルそうな感じでコメカミを人差し指で二三度叩いた。

「連絡ですか」

自分もコメカミに人差し指を当てて乙葉から連絡を待つ、これは三柳に昔から伝わる技術の一つで名前はそのまま以心伝心と言う、理論は脳波の周波を合わせて通信機代わりにする技術だ、いつでも自分の兄妹と会話できる摩訶不思議な技術だ。

波長さえ合わせておけば映像だろうが音声だろうがいつも送れるのが便利だ、三柳の兵隊は常につながっている。

「…」

龍葉がこちらを見てくる、私も龍葉を見つめ返し二人で同時に頷く：新たな仕事が入った、生徒会長が行方不明らしくそれを搜索しよることだ。

外には出ていない、三柳の監視システムを逃れられるほど優秀じゃないと乙葉は言っているが：どうなのだろう。

「俺は敷地外を見てくる、姉さんは敷地内を頼む」

「はい、グッドラック」

龍葉は強く地面を蹴り学校の外へと飛び出していく、すでに刀を抜いて戦闘形態に入っているのが龍葉らしい。

「美咲さん、私ちよつとお仕事があるので：すみません」

「あゝ：一葉ちゃんも大変だね…」

一応美咲には家業である探偵の手伝いと言ってある、疑われてないあたりこの子の頭はネジが二〜三本足りてないのかもしれない。

美咲に手を振って校内に駆けだしていく：が屋上から階段を下りた所で龍葉から短い連絡が入った：内容は『戦闘中 会長重傷 クルスト』だけだ、何があったかわからないけど情報の発信源まで急ぐ事にした。

「ちい！」

薄暗い森の中に火花が散る、ここに来た時すでにバーナード・マクレーンは膝をつきすでに虫の息だった、そいつの目の前に立ってニマニマ笑いを浮かべていたのはエイブラム・クルスト、まるで俺が来る事がわかっていたかのようにそこに立っていた。

「どうしたよ、そんなへつぱり腰じゃあ……」

またあれがくる、とっさに防御の構えを取り受け流しの準備にはいるが……

「俺の剣は止めらんねえよ！マヌケえ！！」

滅茶苦茶でありそれでいて洗練された剣技は巨剣と共に暴風と化し俺をひき肉にするために襲いかかってくる、受け流す事すら精一杯で反撃の余裕すらありはしない……周りの樹木を粉碎しながら鉄の嵐が龍葉を打ち砕こうと襲いかかる。

「刀が！？馬鹿な！！」

二振りあつた刀の片割れが衝撃に耐えきれずに半ばから折られてしまった。

「おいおい、その量産されたミスリウム刀で耐えきれるとマジで思ってたのか？このアイアンインゴットの重量をよお」

折れた刀を投げ捨てて、正眼に構えるとつまらなそうに片眉を跳ねあげるクルスト。

「ちっ、怯え一つ見せやしねえ……これだからクローン兵は嫌いだ、気持ち悪い」

巨大な装飾剣を地面に突き立てて座り込むクルスト、もうすでに戦う気はないようだ……今度は違う奴が出て来た。

クルストに連れられた少女……クルストは名前をオメガと呼び俺達の工場から出た試作品だと言っているが、三柳はここまでクローン

を戦闘向きに作らない…オメガが初めての笑顔を見せた、野生動物が見せる獲物を見つけた時のあの顔だ。

「オメガ、目標はそいつじゃないが…まあいい、少しだけ遊んでやれ」

「あんだすたーん」

「…使い方が違う」

代わりに装飾剣を引き抜いた少女は能面のような笑みのままこちらに突貫してきた、刀を構えてこちらにも迎え撃つ為に地面を蹴った。「それはmistake」

唐突にクルストの声が響いた、後一步といった所でオメガが後ろに下がって刀を空振りしてしまう…間合いと歩幅を見切られていた。「みすて〜いく」

間の抜けた声に恐怖を覚えた、暗闇の中で爛々と輝く金色の瞳は二つの満月を連想させる…巨大な白銀の装飾剣は断首台のソレと同じ輝きを放っており首筋に鳥肌が立つ。

これはやばい！ 反射的に首を後ろに反らして通り抜ける断頭台の刃をかわす。

「む〜、なんでよけちゃう」

眉を垂れさながらせ残念そうな表情を作っているオメガを見て産造まれて初めて恐怖を抱いた、こいつは違う…異能者じゃない。

「オメガ！」

クルストが珍しく声を荒げた、この行為を止めた？ いや違う、犯罪者エイブラハム・クルストは甘くない…原因は恐らくオメガの真上、刀を振り上げた一葉の姿のせいだ。

「殺とった！」

一葉の刀が燃えあがりオメガを真つ二つにしようとして肉薄するが、一葉の体は空中で急激に向きを変える事となる。

先程までオメガの姿があった場所には焦げ跡があるだけだった、遅れて大木が押し折れる音が響き一葉の短い悲鳴が聞こえた。

「みすて〜いく」

毬のように跳ねながら吹き飛ばされていく一葉を眺めながらオメガはそう言い放った、生物には到底浮かべられない邪悪な笑みを浮かべ恐らく超速移動の際に負傷し逆側に向いた足を引きずりながら…オメガはまるで赤ん坊だ、破壊を戦闘を純粋に楽しんでるようにしか見えず、自分の損耗なんてまるで気にしてはいない。

「…やはり早かったか」

クルストが氷のような無表情でそうつぶやいたのが聞こえた。

「帰るぞオメガ」

「うゝまだ遊びたい」

「帰るぞ、命令だ。オメガ」

「…うん」

命令と言った単語を聞いた途端オメガは大人しくなった、落ち込んだように俯いてクルストの手を握った、クルストの瞳がこちらを射抜く。

「悪かったな、茶番に付き合わせて…これで美味しいもんでも食べばいい。【意味】は解るな？」

アタツシケースに詰め込まれた最高級な日本の紙幣、日本人がこよなく愛す諭吉さんだ、意味とはここで起こった事を忘れるといった事だろうか…そう考えた所でクルストが頷いた。

「どうやら正解のようだ。」

「喋りたかったら誰かに話せばいい」

装飾剣を拾ってホルダーに戻しつつクルストはそう語る、戦闘が終わった今クルストはこちらに微塵も興味を示していない、俺じゃ奴を殺せないのを解りきっている舐め方だ。

「おしゃべりは長生きできないって知っているよな」

そして生徒会長の頭に銃を突きつけた、たった一発の小さな炸裂音と共にマクレーンの体が後ろに倒れる。

「こんな感じだな。なあ…三柳の第七機械混成大隊龍葉中佐と第六特別執行部隊隊長三柳一葉少佐…おっと、今はただの潜入工作員か」  
ついでに目の前の巨悪は俺達が動員できる戦力を把握していやが

った、三柳の情報なんて一体どこで手に入れているのだろうか…奴をしばらく探る必要があるかもしれない。

「くる…すとあ」

オメガはキヤツキヤツと笑いながらクルストの袖を引っ張っている。

「その子…まさか道徳を学んでいないのですか？」

茂みから一葉が腕を抑え左右に揺れて現れた、先程のタツクルが結構効いているのか満身創痍と言った感じだ。

「聞いたがりも早死にするぜえ、お嬢ちゃん。おらオメガ、てめえもいつまで俺に体擦りつけてる。欲情でもさせてえのか」

喜ぶオメガの頭を叩いて笑いを止めさせるクルスト、叩かれた頭を押さえて涙目でクルストを睨むオメガ…ダメだ、こいつらの関係性がいまいちわからない。

オメガはそもそもクルストに絶対の忠誠を誓っている訳じゃなさそうだ、恐らく刷り込みされているのだろう【命令】という単語に一切逆らわないようにと、三柳関連で産まれたのは間違いないようだ。

クルストもクルストでオメガを大切にしている、戦闘を止めたのは恐らくオメガの損傷を考えてという事もあるはずだ、続いてオメガを抱く事を拒否している…中身はともあれオメガは見た目はSクラスの美女異能者だ、あれに体を摺り寄せられて喜ばない男は多分いないだろう。

「……………ちっ！」

考えていた事を見透かされたようでクルストは派手に舌打ちをして去っていった、オメガは歩幅があつてないのか転びそうになりながら手を引かれている。

「またあおうな…きょうだい」

そんな事をいいながらクルストに引きずられていって行くオメガ、彼女も…よく、わからない…むしろわかったら俺は自分の頭を疑う。「不思議な二人ですよ、オメガちゃん…殺気なんて全然放たずに

私を殺せる位の勢いで突っ込んできていました」

「姉さん、今は気にしないで乙葉に報告に行こう…どうやら、クルストは大人しくしている気は一切ないようだ。」

稼働途中十字さん(前書き)

こんかいももじけえっす byめじます

## 稼働途中十字さん

学園の地下数百m、遺跡と化したとある部屋で会談が続いている。  
「計画は順調といった所だ」

ソファーにふてぶてしく座り込みコーヒーを口元に運ぶ巨人、名をエイブラハム・クルストと言う男、近くにいつもの少女オメガの姿は無くいつもの三倍は不機嫌そうに報告を重ねていた。

「そうか、ところであの二人はどうだね？計画に使えるそうかね？」  
光の少ない室内、衝立で顔を隠した男がクルストにそう問うとクルストは顎に手を当ててしばらく考えこむ。

「無理だな、戦闘能力が低すぎる、来るべき戦いの日に間に合いそうにもない」

男が衝立の向こうで肩をすくめたのを確認したクルストは視線をコーヒーに戻す。

「しかしクルスト、まさか君が我々に協力してくれるとは思わなかったよ」

コーヒーを再び啜ろうとした所に男の小馬鹿にしたような声が届く、クルストの片眉が跳ねあがりマグカップが音を立てて砕け散った。

「何勘違いしてやがる…今回はたまたま目的が合致しただけだ、お前らは俺の敵と言う事実はかわらねんだ」

手を濡らすコーヒーをソファーで拭い踏ん反り帰る、衝立の向こうとソファーに居るクルスト、二人の交わる事のない視線が交わった。

「そうか…君が我々の傘下に下ってくれればいいんだがねえ」

「ハッ！何ふざけた事言つてやがる、そんな事微塵も思っている男じゃねえだろ？てめえはよお」

「ほう、何故そう思うんだい？」

「隙を見せたら今でも俺の首かつ切ろうとしている男がそれを聞く

か？脳味噌がとうとうおかしくなっただんかい？」

クルストの言葉に男はクツクツと笑う、その姿を気に食わなかったのかクルストは盛大に鼻を鳴らしてそっぽを向き、口をつぐんでしまう。

「まあいい、クルスト。新たな指令だ」

壁に控えていた女がクルストの近くまで近寄り一枚の紙を渡す。

「……………てめえ正気か？この女…三柳の…」

「正気だったらこんな事をしてはいないよ、出来るね？」

紙から視線を外し衝立の向こうにいるであろう男を目線だけで見つめる、時間して数秒だが悠久とも言えるような体感時間と沈黙が場を支配する、先程クルストに紙を渡した女が唾を飲みこみ、その音を合図に沈黙は終わった。

「誰に口を聞いてやがるんだ？やってやるよ…生徒会長」

紙を魔力で燃えあがらせ灰に戻しながらエレベータへと向かう、後ろで生徒会長…バーナード・マクレーンが笑っている。

エレベータの中には膝を抱えたオメガが居た、クルストは呆れたように前髪を掻き膝を抱えたオメガの手を引き地上へのスイッチを押す。

その姿を見たマクレーンが鼻を鳴らしクルストが唾を吐き捨てる。

「会長、いいのですか？あの男を野放しにしている」

紙を渡した女、マクレーンの本音が去ったクルストを見つめてそう言った。

「いいんだよ、英雄ヨシユアの息子…そして娼婦マグダラの息子でもあるあの男は三度の飯より他人を助けるのが好きなんだ」

「…私にはそう見えません」

「クツクツク、所詮彼は使い捨てだ…面白いようにこちらの計画に乗ってくれる、彼ほど使いやすい男はいないと思うよ。オメガの元を提供したのも私だからね…彼は案外誠実な男なのさ…」

「銀介君、これ似合うと思います?」

銀介の前で胸元の大きくあいたワンピースを着てポーズをとってみると銀介は顔を反らした。

「い、いいんじゃないかな…一葉君は世間一般に見て容姿はいい方だと思っしスタイルもそうだね、黄金比を保っていて…世の中の男性の好みに…」

随分だからだと長くほめてくれてはいるが要するに銀介の好みではないのだろうか?彼は女心をわかってない。

「くる…すとあ、これにあうか」

なんだか聞き覚えのある声が聞こえた、間延びした抑揚のない声が客足の少ない服飾店に響く。

「…ちっ!」

明らかにこちらに向けられた舌打ちを感じ取りそちらを振り向くと…ほらそこには予想通りお前らなんでこんな所に居るんだよといった顔をしたクルストとドレスを着て回転し続けるオメガが立っていた、あのゴシッククローリータな服装はクルストの趣味だろうか?

「んな訳ねーだろ、子供にロリ着せてどーするよ」

私の表情から読み取ったのだろう、相変わらず聞いてもいない事は答えてくれる男だ…はてさて先程の言いようだとクルストはオメガに違う服を着てほしいように聞こえるが…

「あつたりまえだろ、なんでこんな恥ずかしい服装した奴と俺様と一緒に歩かにならん、まっぴらごめんだ」

「くる…すとあ、にあうのか?にあわないのか?」

独楽の様に素早く回転しているオメガがドツプラー効果を残しつ

つクルストにそう聞いている、当の本人は頭が痛そうに眉間を指で抑えるだけだ。

「あー…はいはい、それが欲しいなら買ってやるよ。似合ってる似合ってるウワーオヒメサマミタイダー」

明らかに棒読みで不躰で女性を馬鹿にしきつた適当な答えだけどオメガは顔を赤らめながら喜んでいる、どうやらクルストも女心オトメソウルを理解できない人種のようなのだ、こちらの銀介と大差ないがそれでもオメガ本人の心の琴線オトメソウルには響いたようだから問題無しとしよう。

「クルスト！ここであったが百年目！今日こそお前をぶちのめして…」

隣で銀介が何か言っているがどうせ勢いよく飛びかかってぶちのめされるだけだ、ここ数日間で何度行われたやりとりだかわかった物ではないしその度にいちいち止めるのも面倒になってきた、銀介の一男心《溢れんばかりのシャウト》は止められないし放っておこうと思う、新作のワンピース欲しいし。

さて銀介がぶちのめされている間に私や龍葉の容姿を細かく形容しておこうと思う、私達三柳は銀髪で紅眼だと言う事はすでに重々承知だと思うが…これは一応戦闘形態なのである、気持ちを静めている間は髪の毛は黒いし眼は空色だ。

まあここに来て人間のフリをする必要もないから本性を出してある、この髪色と目色は気に入っている…話が反れた…異能者の端くれでもあるため人間の美的感覚で言うと美男美女の部類に入る、特に私は足が自慢だ。

細すぎるわけでもなく太い訳でもなく適度に肉付きが良かったため結構足を見られる事がある、男が好きになる足と言われたのはちよつとシヨックだったが…ともあれこの長くて綺麗な足を家系譲りのサラロングの銀髪とぱつちり紅眼は私の誇りと言っても過言ではない、胸とかお尻の事は言うな、人並より小さくて少し、ほんのわずかだが気にしている！だから言うな、言ったら泣く…年齢気にせず泣いてやる！どうでもいいけどこのPC変換少なすぎるjk…

「あべし!？」

「はっ! 雑魚が! 約束通りそこのお嬢ちゃんはこっちで預からせてもらうぜ」

…銀介エ: 貴方何勝手に人の事景品にしているんですか? あれですか? 私に価値なんて…三柳の機密が一杯でしょ、刀は技術が一杯でしょ、私を孕ませてその子供から体細胞採れば複製なんて容易で兵士なんて無尽蔵に用意できるでしょ…あれ? もしかして学園爆撃フラグ?

「クルストさん、一つ聞かせてください!」

とりあえずこれを聞いておかねば…クルストはまた変な事言いだすんじゃないかなこの女みたいな目で私を見ているけど…ま、負けないもん。

「私の体目的って線は…」

そこまで言ってクルストを見つめてみると彼は私をつま先から見上げていって胸の所で視線を止まらせにやりと笑った、あれ? そっちの線なら皆もついでに私も死ななくて済んで大助かりなんですけど…私一人が純潔散らせばそれでいいなら…いや、やっぱりちょっと考えさせ…

「【小物】に興味はねーよ、お嬢ちゃん」

そう言い放った、私の胸を見ながらはつきりと小物って…あ、後少しでこだもん!

「さ、大人しく着いてこい」

すでに心が押し折れた私の首根っこをひつつかんでクルストはどこぞへと進んでいく、オメガは嬉しそうにニマニマしながら寮の方へと引き返していった、無表情な女の子だと思ったけどあんな笑い方も出来るオメガに感服だ。

「私なんか攫っても価値なんてありませんよ…どうせ私は小物の大量生産品ですしい…うう…うえーん…クローン同士でなんで差が出るんですかあ…私だって…」

クルストに引きずられている間中ずっとこんな愚痴を言っている

がクルストはうんざりしてげんなりした顔をするだけである、終いにはこんな事を私に聞いてきた。

「お前本当にあの三柳のクローンなのか？それにしちゃあ随分と感情豊かすぎるぞ」

とうとう私が三柳出身者がどうか疑ってきた。

「真正正銘の三柳製のクローンですよ…試作型新世代局地戦用クローン個体名一葉ですよ…」

うなだれながらそう呟いて見る、クルストの動きがぴたりと止まった。

「……………なんだと？」

クルストの纏っていた空気がわずかに揺らぐ、視線は引きずっている私に注がれている…やはり信じてくれないようだ、確かに性能は下級戦士並だけど私は指揮能力が高いタイプだ。

「…局地戦？<sup>プロトタイプ</sup>試作型？馬鹿な、ありえん」

「そこまで私弱いですか…一応並の異能者位には強いつもりなのですけど…」

「違う、三柳のプロトタイプは戦闘力は軒並み低いから問題ではない、俺が聞きたいのは…局地戦用だと？つまりお前はアレか？刀でしか戦闘が出来ないタイプなのか？」

クルストの疑問に私は首を傾げた、それは局地戦用なのだ、私にはある一定の戦闘方法しかない。

「馬鹿な…奴の狙いはなんだ？」

私の首から手を離して顎に手を当てて考え始めてしまった、もしかしたら…逃げれる？

「逃げるなよ、逃げたら後ろから斬りかかるぞ」

考えた格好のまま私の考えている事を言い当てられた、仕方ないから大人しくしよう…あー桜が綺麗だな…そういえば私が捕まっていたステーションにも桜があつたなあ…あそこは分家の人とか人間の権力者達もたくさん訪れるから娼婦とかさういったお店もたくさんあるんだよね」

「……………わからん、お嬢ちゃん乙葉の考えている事はわかるか？」

「私にはちよつと考え及びません」

「ハレファツ　ンルヤ…」

彼はもはや諦めたといった感じで呻くように呟いた、頭が痛いのか頭を抱えるようにして頂垂れている。

「ちよつとお聞きしたいのですが…もしかして私に秘密つてありませんか？私の知らないような…それとクルストさんは乙葉様とお知り合いなので？」

ちよつとした疑問だったのだがクルストは何かを得たようであり、顎に手を当てて何かを考え…いや思い出そうとしていた、先程までの怒りを通り越して呆れたような表情と違っていつものどこかダルそうなしかめっ面に戻った。

「前者の方は俺も知らん、どうしても知りたいならその体を解剖すりゃわかる事だが…」

片目だけを開けてこちらをちらりと見た、でも解剖つて…私は両手を振り首を振りボディランゲージで出来るだけ断つてみた、誰にも見せた事のない中身なんて見せたくないし。

「ま、誰だつてそんなもんだな、後者は…まあ守秘義務があるわけでもないしな、語つてやるつ、あれは今から五年前か、俺がまだまだ穴の青いガキだった頃だ…」

稼働途中十字さん（後書き）

次回は過去編です、原作を読んだ方は読み飛ばしてください、未読の方は読んでください byあじます

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3600o/>

---

常闇学園

2010年11月15日23時40分発行